

今後の取組について

これまでの経緯と今後の予定



これまでの経緯

- ・木津川河川事務所では、平成27年の水防災意識社会再構築ビジョンを踏まえて、平成28年6月に減災対策協議会を設立している。
- ・現取組方針(R3年度改定)では、令和7年度までに達成すべき目標・概ね5年で実施する取組を設定。今後、取組方針の改定を想定。
- ・木津川上流河川事務所では、水防災意識社会再構築・流域治水の自分事化に向けた住民の防災意識を確認するため、平成30年と令和5年に沿川住民を対象に、防災意識調査を実施している。

平成27年9月 関東・東北豪雨災害(鬼怒川の洪水氾濫)

平成27年12月 水防災意識社会再構築ビジョン

■社会資本整備審議会答申(平成27年12月)

「施設の能力には限界があり、施設では防ぎきれない大洪水は必ず発生するもの」へと意識を変革し、社会全体で洪水氾濫に備える必要がある。

木津川上流部大規模水害・土砂災害に関する減災対策協議会 創設
(平成28年6月1日)

『「水災害意識社会 再構築ビジョン」に基づく木津川上流部の取組方針』の策定(平成28年7月26日)

令和2年度までに達成すべき目標・概ね5年で実施する取組を設定

■緊急行動計画(平成29年6月20日)

平成28年8月、台風10号等の一連の台風による豪雨災害(中小河川の氾濫)を受けて、とりまとめられた委員会の答申(H29.1)を踏まえ、水防法改正に基づく協議会の設置、水害対応タイムラインの作成促進、要配慮者利用施設における避難体制構築への支援、水害危険性の周知促進、防災教育の促進等の32項目をとりまとめた。 ※H29.12.1 中小河川等治水対策プロジェクトを設立し33項目に追加修正

平成30年7月豪雨

住民に向けたアンケート調査実施(平成30年9月25日～平成30年9月26日)

■緊急行動計画の改定(平成31年1月29日)

平成30年7月豪雨を受けて、とりまとめられた委員会の答申(H30.12)を踏まえ、社会全体で洪水に備える「水防災意識社会」を再構築する取組をさらに充実し加速するため、多くの主体の事前の備えと連携の強化の観点等より、2020年(令和2年)度目途に取り組むべき緊急行動計画を54項目に拡充。

令和元年10月 東日本台風

■社会資本整備審議会答申(令和2年7月)

近年の水災害による甚大な被害を受けて、施設能力を超過する洪水が発生することを前提に、社会全体で洪水に備える水防災意識社会の再構築を一步進め、気候変動の影響や社会状況の変化などを踏まえ、あらゆる関係者が協働して流域全体で行う、**流域治水への転換**を推進し、防災・減災が主流となる社会を目指す。

『「水災害意識社会 再構築ビジョン」に基づく木津川上流部の取組方針』の改定(令和4年3月25日)

令和7年度までに達成すべき目標・概ね5年で実施する取組を設定

■「水災害を自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす総力戦の流域治水をめざして」提言(令和5年4月)

- ・激甚化・頻発化する水災害から命を守り、被害を最小化するためには、**住民や企業等が自らの水害リスクを認識し、自分事として捉え、主体的に行動することに加え、さらに視野を広げて、流域全体の被害や水災害対策の全体像を認識し、自らの行動を深化させること**で、流域治水の取り組みを推進していく必要があります。
- ・このため国土交通省では、令和5年4月に「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会」を設置

住民に向けたアンケート調査実施(令和5年11月28日～11月30日)

■流域治水プロジェクト2.0への更新を表明(R5.8)

- ・グリーンインフラや治水機能以外の多面的な機能も考慮する必要がある。
- ・気候変動を踏まえた治水計画に見直すとともに、流域対策の目標を定め、あらゆる関係者による流域対策の充実を目的とし、**気候変動を踏まえた河川及び流域での対策の方向性を『流域治水プロジェクト2.0』として、全国109水系で順次更新し、流域関係者で共有**

今後、令和8年度以降に関する取組方針について検討予定

全体の流れ (今後の予定)

	令和 6 年度		令和 7 年度							令和 8 年度
	R7					R8				
	2月	3月	春	6月～10月 (出水期)	10月	12月	1月	2月	3月	春
木津川上流部 減災協議会			R7.5.26 ✓減災にかかる取組 方針の確認、進捗 状況・取組事例の 共有 等							(出水期前予定) ✓減災にかかる 次期 取組方針の確認、 進捗状況・取組事 例の共有 等
木津川上流部 減災協議会幹事会 (奈良圏域ブロック) (三重・京都圏域ブロック)			報告 [水防災意識社会 再 構築ビジョン] ✓出水期前までに、 “取組方針”の進捗 状況とりまとめ、 流域タイムライン への意見とりまと め等	✓木津川上流部における減災にかかる具体的 取組について ・取組方針に対する進捗状況の共有 ・水防に係る現状と課題について意見交換 ・流域タイムラインに基づく取組（水防レバ ミテーション会議等） 等					報告 [水防災意識社会 再構 築ビジョン] ✓出水期前までに、 “取組方針”の進捗状 況とりまとめ、流域 タイムラインへの意 見とりまとめ等	
担当者 勉強会							(10月ごろ予定) ✓次期取組方針策定 に向け取組メ ニュー検討・意見 照会			
公表資料										

協議会資料公開
(R7.5以降)

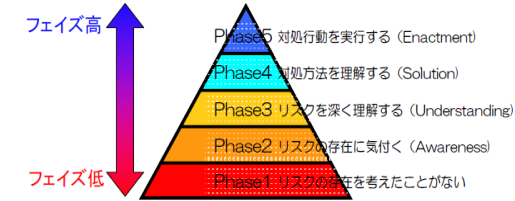
協議会資料公開
R8～R12
取組方針

反映

今後の取組について

1)H30年住民防災意識調査の分析結果の共有

- 平成30年に実施したアンケートでは、住民の防災意識レベル(フェイズ)の到達度合いを評価するため、5つのフェイズ区分の概念を軸に評価項目(質問)を設定した。
- 回答者をフェイズ分類した結果、水害リスクの認知に課題があるPhase1(約40%)・Phase2(約20%)に分類される住民が7割弱を占めることが分かった。

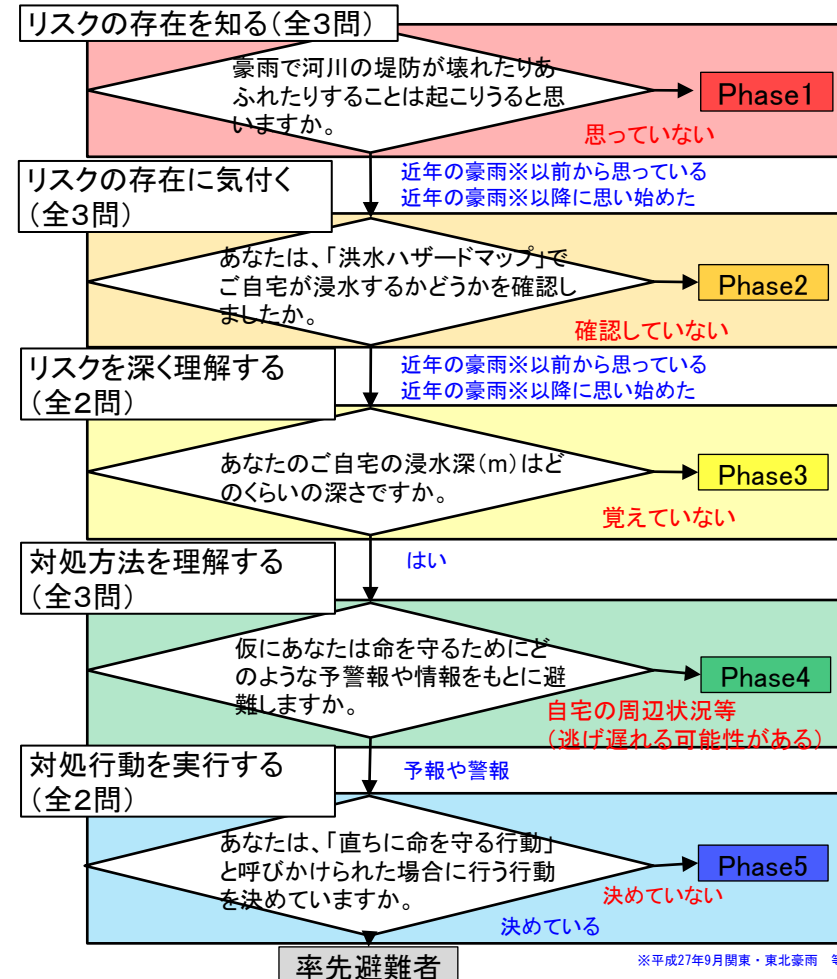


参考)住民の防災意識水準に応じた教育プログラム策定手法に関する研究

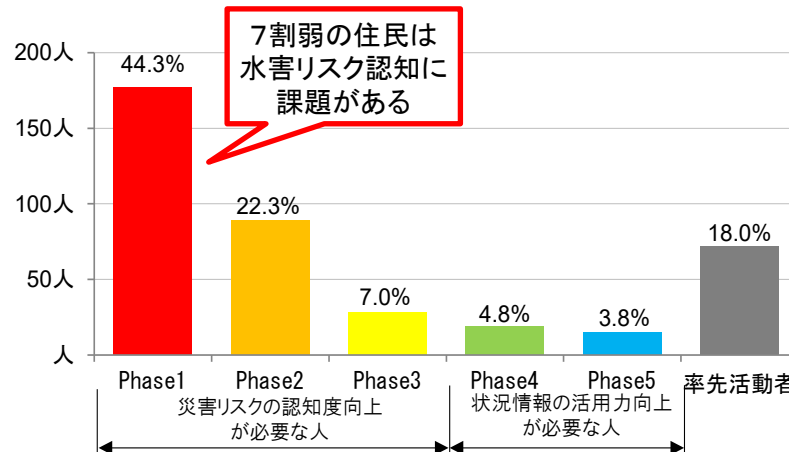
■実施概要

項目	内容
実施期間	平成30年9月25日～平成30年9月26日
対象市町()内サンプル数	伊賀市(142)、名張市(188)、他エリア:相模郡南山城村、相模郡笠置町、宇陀市、山辺郡山添村(70)
サンプル	400サンプル(信頼度95%、精度5%)
調査方法	・Webアンケート (防災に興味がない場合にも回答してもらえるため、リスクの存在に気づいていない住民の回答を得ることができる)

■質問例



■結果



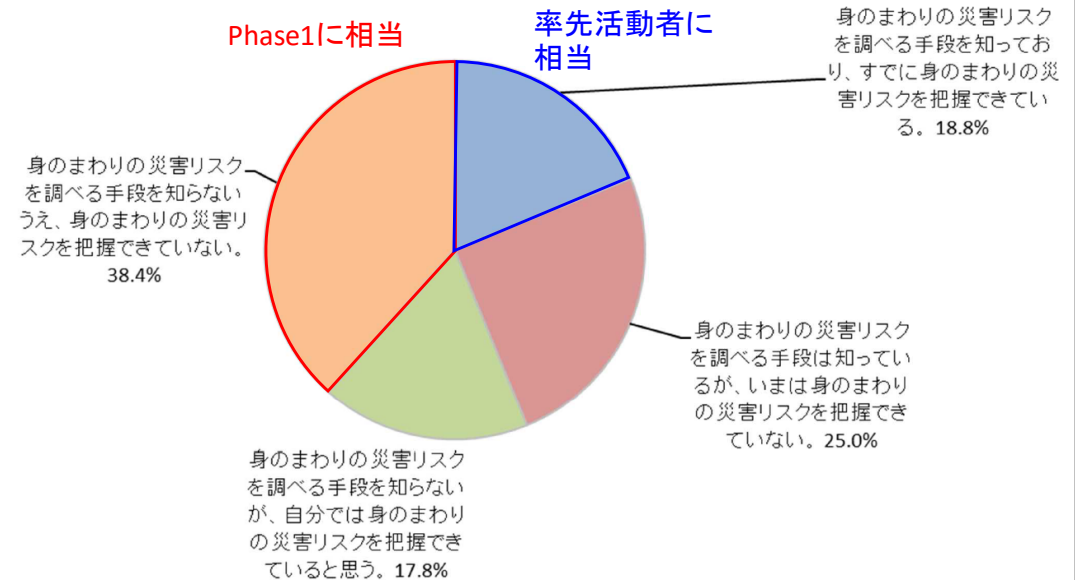
2)R5住民防災意識調査の分析結果の共有

- 令和5年に実施したアンケート結果を見ても、Phase1に相当する住民が4割弱存在していることが分かる。

項目	内 容
実施期間	令和5年11月28日～11月30日
対象市町 ()内 サンプル数	・伊賀市(160) ・名張市(160) ※年齢は20～69歳(ランダム)
サンプル	320サンプル
調査方法	・Webアンケート

Q.あなたは自宅等、普段の身のまわりの災害リスク※を調べる手段を知っていますか。また事前の備えとして、すでに身のまわりの災害リスクは把握していますか。(n=320)

※災害リスクとは、たとえば「洪水による自宅の浸水」、「がけ崩れによる住宅の倒壊や人の負傷」など人や財産等に損失を受ける可能性、リスクを指します。



3) アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

- 「率先避難者」が約2割弱程度存在する一方で、「Phase1」が最も多い。住民の防災意識の底上げには、「Phase1」の減少、「率先避難者」の増加が望ましいと考えられる。
- この状況を踏まえ、取組方針の進捗にあたっては、下記に示す3つの取組を実行することが有効と考えられる。

現時点のPhase分類をもとにした有効な取組

①Phase1に向けて

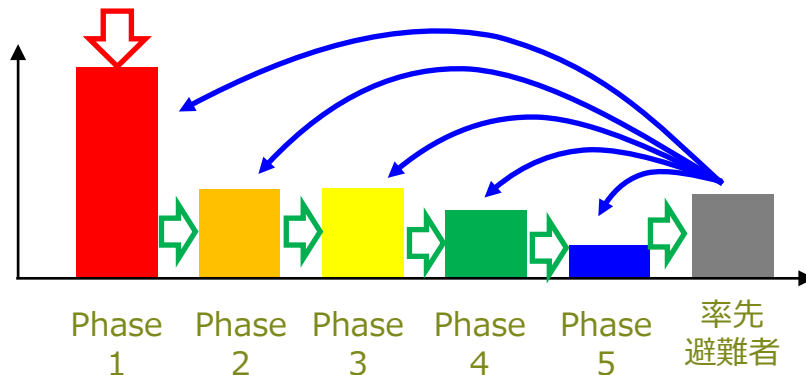
- リスクを認知できていない方に向けて自らのリスクを認知していただくような取組

②各Phaseに向けて

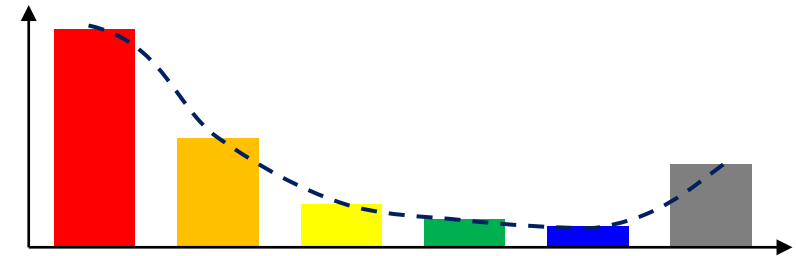
- 各Phaseの人がワンランクアップを行えるような取組

③率先避難者に向けて

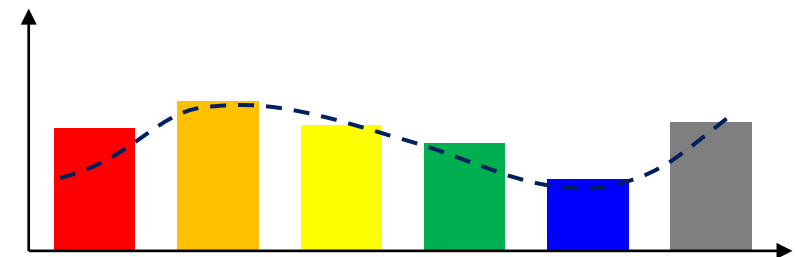
- 約20%の率先避難者が旗振り役となり、全体のPhaseを引き上げるような取組



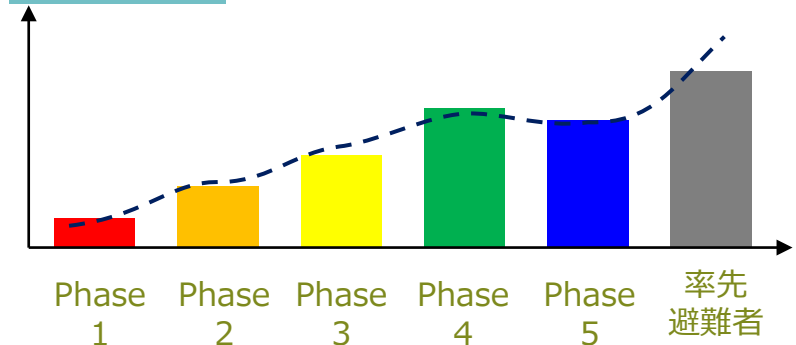
平成30年度



令和●年度



令和●年度



Phase分類の経年変化イメージ



3)アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

- 木津川上流部大規模水害・土砂災害に関する減災対策協議会では、取組の進捗をさらに図るため、特に下表に記載している取組について構成機関が連携し、実施する。
- 昨年度に実施した具体の取組内容について、次頁以降紹介する。

分類	構成機関と連携して実施する具体の取組
①フェイズ1に向けて リスクを認知できていない方に向けて自らのリスクを認知していただくような取組	○まるごとまちごとハザードマップ整備
②各フェイズに向けて 各Phaseの人がワンランクアップを行えるような取組	○住民一人一人のマイ・タイムライン、マイ防災マップの作成促進
③率先避難者に向けて 約20%の率先避難者が旗振り役となり、全体のPhaseを引き上げるような取組	○毎年、水防団や地域住民が参加し重要水防箇所等水害リスクの高い箇所の共同点検を実施

3) アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

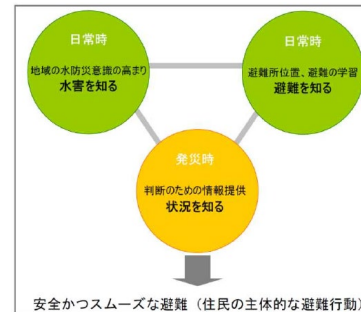
① まるごとまちごとハザードマップ整備

■ まるごとまちごとハザードマップとは

自らが生活する地域の水害の危険性を実感できるよう、居住地域をまるごとハザードマップと見立て、生活空間である“まちなか”に水防災にかかわる情報を標示する取組。

■ 目的

“まちなか”に表示することにより、日常時から水防災への意識を高めるとともに浸水深・避難所等の知識の普及・浸透等を図り、発災時には命を守るための住民の主体的な避難行動を促し、被害を最小限にとどめることを目指す

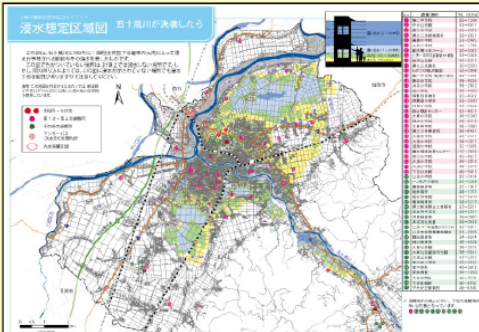


■ まるごとまちごとハザードマップ設置例



■ ハザードマップとの比較

水害ハザードマップ



○：メリット △：デメリット

- ：自宅や勤務先などの知りたい場所の**浸水深**や近くの**避難所・避難場所**を確認できる
- ：**アンダーパス**や**内水氾濫**などの**危険箇所**も確認できる
- ：**避難に必要な多くの防災情報**について確認できる
「情報の取得方法」や「避難の目安」、「非常持ち出し品に関する情報」など
- ：**防災教育や勉強会、避難訓練等で活用**できる
- △：**防災に興味がない人は、浸水深を確認するまでに至らない可能性がある**
(意識しないとハザードマップは確認されない)
- △：**浸水の高さをイメージしづらい**

まるごとまちごとハザードマップ



水害ハザードマップの内容を、それぞれの地域で具体的に、臨場感をもって認識し、避難の実効性を高める

- ：“まちなか”にあるので**無意識に目に入る**
- ：日常生活上で視認されやすく**防災に興味が無い人でも浸水深や避難所などの情報を知ることができる**
- ：**浸水深を感覚的に理解**できる



3)アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

① まるごとまちごとハザードマップ整備

木津川上流河川事務所では、市町村等と連携して水防災意識社会の再構築に取り組んでおり、生活空間である“まちなか”に想定される浸水深等を標識として設置する「まるごとまちごとハザードマップ」の取組を推進しています。
このたび、木津川上流河川事務所管内としては、京都府域で初となる浸水深標識を笠置町に設置し、2月5日(水)に除幕式を執り行いました。

【日 時】 令和7年2月5日(水)10:00～
【場 所】 笠置保育所 (京都府相楽郡笠置町有市羽根田 24)
【主 催】 木津川上流河川事務所、笠置町
【出席者】 笠置町長
笠置保育所長
木津川上流河川事務所長



パネル展示ブース



笠置町長コメント



想定最大規模の降雨により木津川が氾濫した場合の浸水深を表示した標識が設置され、紙面上では伝わりにくい情報が日常生活上で視認されやすくなり、笠置保育所の保護者や近隣住民の皆様にも日頃から災害に対する危険意識を高めていただけるのではないかと期待しています。

木津川上流河川事務所長コメント



大雨が降る可能性は日本のどこにでもある、ということを知って頂きたいです。本日の「まるごとまちごとハザードマップ」の取り組みが、笠置町にお住まいの皆さまの防災意識の向上の一役に繋がれば幸いです。

※今後も、関係自治体等と設置に向けた調整を進める

3) アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

② マイ・タイムライン、マイ防災マップの作成促進

伊賀市民を対象に、「お天気キャスターと作る！ マイ・タイムライン講習会」を伊賀市と実施しました。流域治水アンバサダーである親見麗菜氏と土井邦裕氏を講師にお招きし、伊賀市を中心とする木津川上流域の気象の特性と過去の災害についての講演や、その後に、「逃げキッド」を用いて参加者一人ひとりの「マイ・タイムライン」の作成を行いました。

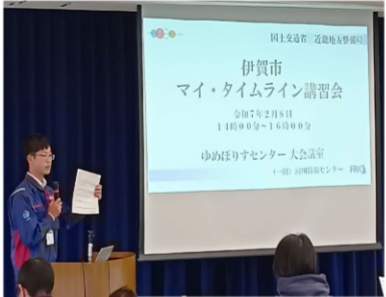
【日 時】 令和7年2月8日(土) 14:00～16:00
【場 所】 ゆめぼりすセンター 2F大会議室
【主 催】 木津川上流河川事務所、伊賀市
【出席者】 稲森稔尚 伊賀市長
土井邦裕(気象キャスター、流域治水アンバサダー)
親見麗菜(気象キャスター、流域治水アンバサダー)
木津川上流河川事務所長
伊賀市民 35名



▲親見キャスターによるH29洪水の紹介



▲伊賀市長の開会挨拶
吉田所長の閉会挨拶



◀マイ・タイムライン作成の様子

- 参加者からの主なコメント
- ・大変勉強になりありがとうございました。
 - ・避難先の受入れが、すべての人が避難することができるのか不安。
 - ・地震の場合の同様の講座もあれば、是非参加したいです。
 - ・避難するタイミングを家族と相談したいと思った。
 - ・我が家の浸水深をはじめて知った。
 - ・事前に避難についてをイメージすることは大切だと思いました。



土井キャスターによるマイ・タイムライン作成の説明

※今後も、関係自治体等と実施に向けた調整を進める

3) アンケート結果分析を踏まえた今後の取組

③ 重要水防箇所等の共同点検



水防団や地域住民が参加し
重要水防箇所等水害リスクの高い箇所について共同点検ができるよう、
構成機関担当者による点検(情報共有)を実施

■ 重要水防箇所の情報共有と関係機関との共同点検（情報共有）の実施イメージ



4)上野遊水地運用開始から10年

■ 上野遊水地事業

岩倉峡狭窄部上流上野地区の浸水対策として、下流の流量増加を生じる河川改修のみで対処することは困難であることから、上野遊水地と川上ダムで湛水するとともに、木津川、服部川及び柘植川の河道掘削等の河川改修を併せて実施しています。

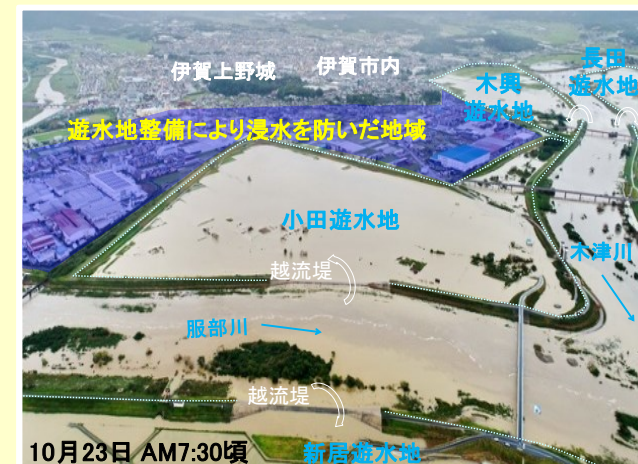
上野遊水地については、平成27年6月より運用され、今年(令和7年)で運用開始10年の節目を迎えます。



■ 事業効果

平成27年より上野遊水地の運用を開始し、平成29年台風21号において、木津川及び服部川で、4つの遊水地に越流し、約600万立方メートルを貯留しました。

遊水地の整備により上野地区において約160haの浸水面積、約760戸の浸水戸数の被害を解消できたと推定され、上野遊水地事業の効果が発揮されました。



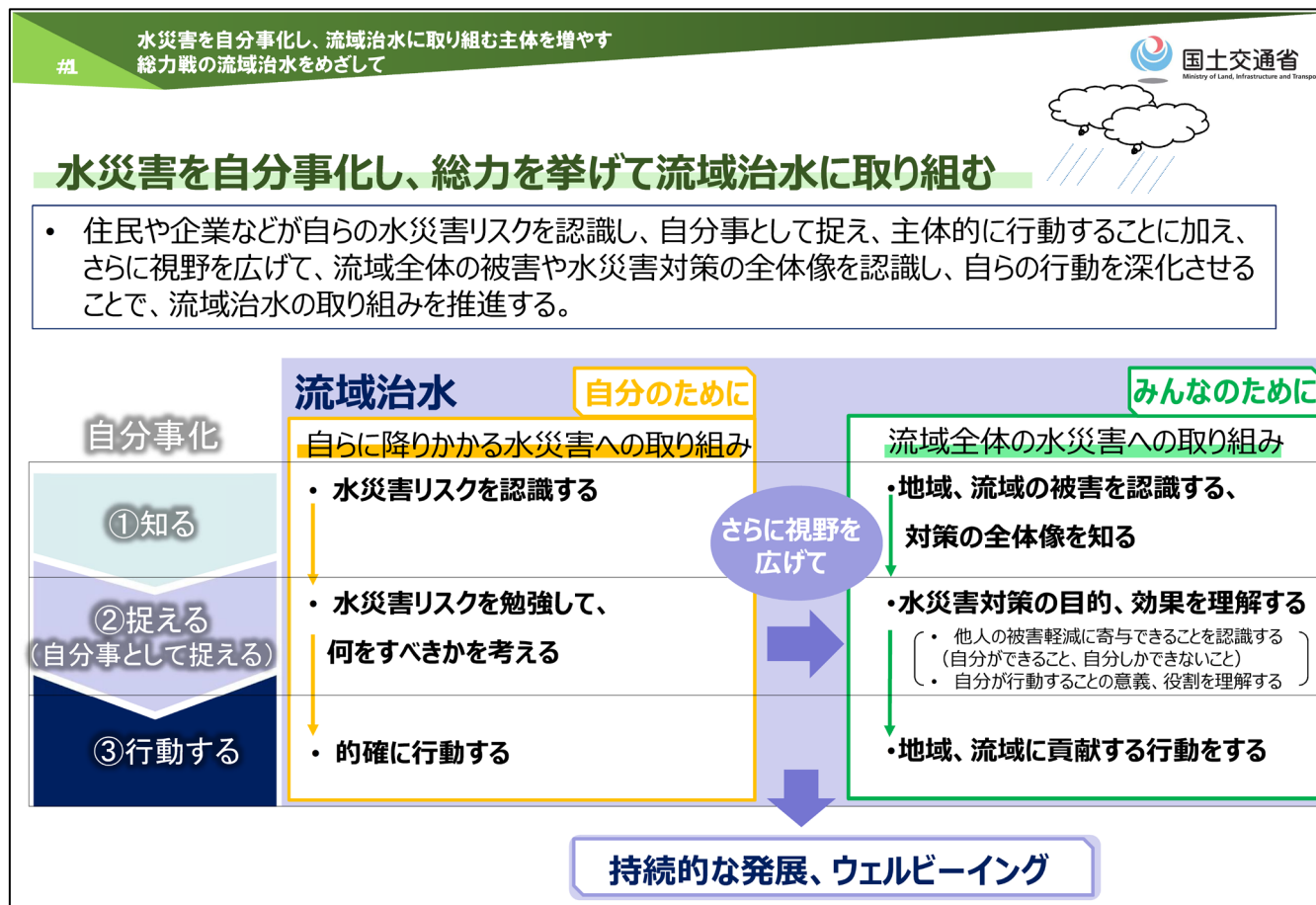
平成29年10月23日 遊水地湛水状況

【意見交換】

・水災害リスクの自分事化に向けた 伝え方の工夫

1) 水災害リスクの自分事化について

- 国土交通省では、令和5年4月に「水害リスクを自分事化し、流域治水に取り組む主体を増やす流域治水の自分事化検討会」を設置し、普及施策の体系化と行動計画をとりまとめている。
- 流域治水の推進にあたっては、「知る」→「捉える(自分事として捉える)」→「行動する」という段階において、「自分のために」から「みんなのために」とさらに視野を広げていくことが必要とされている。
- 水防災意識社会再構築に向けても、同様のステップが必要と考えられる。





【参考】伝え方の工夫

いかに水害というネガティブに感じられることを自分事化できるか？ 豪雨が頻発し、既に他人事化できない気象条件になっていることや、農作物をはじめとして様々な恵みを流域の水資源を活用して享受していることなど、人と水との様々な関わりを伝えていくことの重要性がこの検討会でも議論されている。これらがやがて、公共団体からだけでなく、メディアからも、SNSでも、何らかの形で人々に伝わっていくだろう。

しかしそのテーマや内容が、いかにも教条的だったり、不安を煽るものばかりであれば、人は聞く耳を持たないだろう。人々の心に働きかけ、うまく自分事化してもらうためには、その「伝え方」が大事になる。検討会では、この点について貴重な意見が得られた。以下にその内容を端的に紹介する。

その1 発想をひろげる

伝える工夫は様々にある。まずは視点を変えて、ネガティブなことでも、おしゃれに、かっこよく見せる、楽しいことに焦点を当てることがある。釣り、キャンプなど水辺のアクティビティや、地域の自然、産業や水循環に触れる体験など、様々な「楽しいこと」の中で水害について考える機会を創れるし、雨水を原料とするサイダーを開発して、水質や水資源について考えるきっかけをつくるような、それこそおしゃれな取組事例もある。流域治水が心のファッションになるように、発想をひろげていきたい。

その2 情報を提供しすぎない

これから流域治水への取り組みを促す様々な活動を行うとき、取り組みを促す側が、その相手に情報を提供しすぎないことも大きなポイントになる。少しの情報にヒントを得て、主体的に考え、行動を組み立てて、実際に体験したことは確実に自分事化されるからだ。

その3 人数を多くしすぎない

講座やイベントを行う場合、参加人数を多くしすぎないことも工夫の一つになる。講座やイベントの主催者、そして、参加者を受け入れる地域の側が、相手の名前を覚えられる人数にすると良い。そうすれば、参加者は、「自分のことを見てくれている」という感覚を持てるし、居心地よく安心できる。そういう状況下では、主体的に考え行動する意欲も湧きやすい。

これから水害リスクの自分事化を図り、流域に視野を広げていく上では、行政の取り組みにもこのようなセンスが求められるだろう。「流域治水を通して自分のことを見てくれている」という感覚を個人が持ちうるか、そして、「確かに自分もそこに関わっていった方が安全だな」と思われるようになるか、伝える工夫に期待したい。

【参考事例】「えちごせきかわ大したもん蛇まつり」(新潟県)

- 新潟県関川村
- 毎年8月下旬開催, 2019年で**第32回**
- 1967年羽越水害**から20年契機(1987年~)
- 関川村の大蛇伝説と交え, **水害を伝承**する

〈まつりの内容〉

- 大蛇パレード**
- 犠牲者追悼の式
- 灯笼流し
- 小中学生による歌・紙芝居 etc

〈大蛇について〉

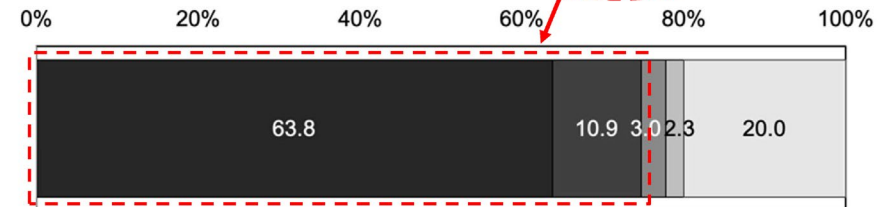
- 大蛇の長さ82.8m**(水害発生8月28日に由来)
- 胴は竹とワラで, 村の**54集落**が分担して作成



発災日を知っている？

問17 あなたは羽越水害が発生した日を知っていますか。以下の空欄に数字を埋めてみてください。

昭和 年 (西暦 年) 月 日



■ 完答 (n=1,689) ■ 8月28日のみ正答 (n=288) ■ 1967(昭和42)年のみ正答 (n=80) ■ 不正解 (n=60) □ 無回答 (n=529)

**発災から50年以上経過しているが, 発生日を知っている人は4人に3人。
 まつりの大蛇の長さ 82.8m が影響していると考えられる。**



門倉七海, 佐藤翔輔, 今村文彦(2020), 発災から50年経過した水害被災地の記憶と備えの実態分析:1967年羽越水害をまつりで伝承する新潟県関川村, 地域安全学会論文集, No. 37, pp. 117-123

2) 「楽しい」×防災での「自分事化」の推進

- 水災害リスクの自分事化に向けた伝え方の工夫として、他の構成機関の参考にもなるような事例や今後実施したい・できそうなこと等があれば、協議会でご紹介いただけないでしょうか。

- 水災害リスクの自分事化に向けた伝え方の工夫を実施した事例
- 今後、実施したいこと・できそうなこと
- 各構成機関が連携すれば、できそうなこと

＜水害について考える機会となりうる「楽しい」ことの例＞

イベント



名張ひなち湖マラソン大会※



キャンプ等水辺のアクティビティ



平成榛原
こどもの
もり公園※

釣り



地域の 自然



水循環に触れる 体験



※: 構成機関に関連のあるイベント・施設を整理

人々の暮らしを守り 自然を守り 川とともに生きる

木津川上流河川事務所

- うちわ 裏

【参考】「防災アニマル診断」の紹介

- 例えば、地域イベント等での「防災アニマル診断」うちわ配布が考えられる。
- イベント等で実施することで、防災に普段関心のない住民でも参加しやすく、より多くの方に水災害リスクの自分事化を推進できると考える。

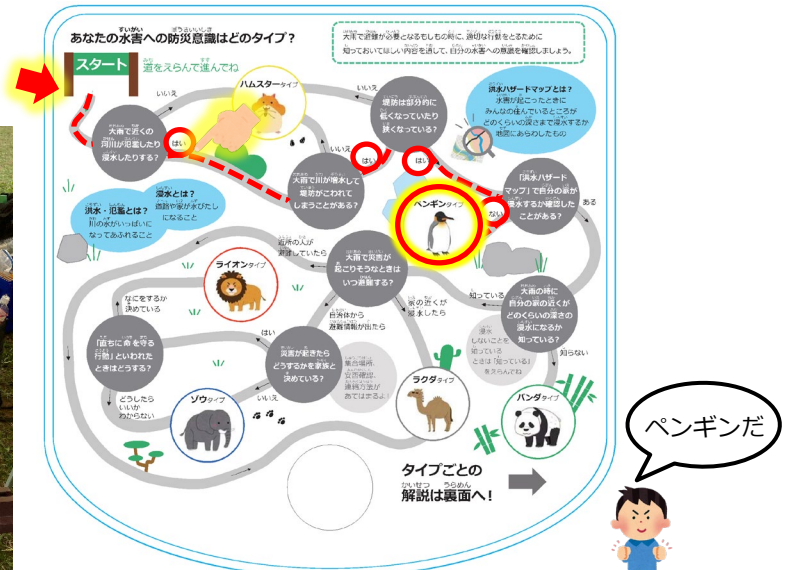
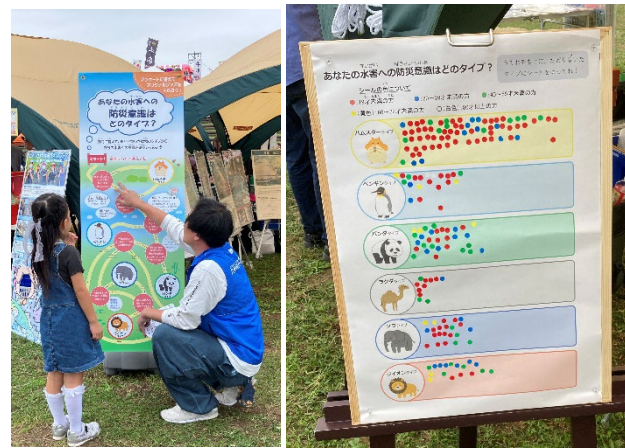
■イベントでの活用イメージ

1 イベント等でうちわを差し出し、診断の実施を勧める



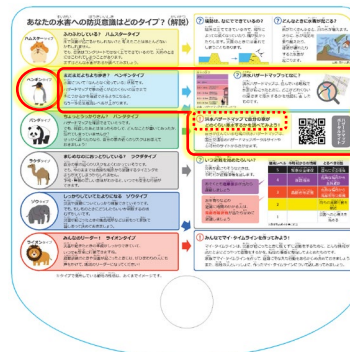
診断しませんか

2 迷路をたどり、防災意識を測る設問に答えると、防災意識レベルに応じて動物タイプが診断される
※診断結果はシール等で集計すると良い



3
うちわの裏面(解説)を見て、自分のタイプに応じた対応を確認していただき、必要に応じて解説を行うことで、住民は気づきを得て、水災害リスクの自分事化に繋がる

確かにハザードマップをきちんと見たことがないかも



ハザードマップを一緒に確認する

マイタイムラインを一緒に作成



【参考】「防災アニマル診断」の紹介

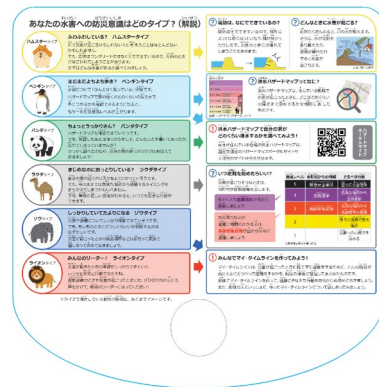
- ・「防災アニマル診断」のうちわを配布することで、住民は学んだ防災に関する知識を出水期に思い出すことができる。
- ・診断結果を集計することで、自治体担当者は住民の防災意識レベルを把握することができる。

■ イベント後の活用イメージ

住民

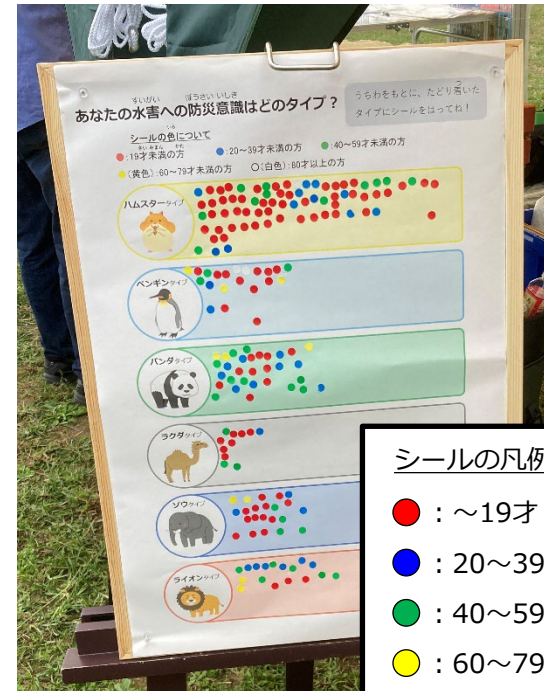
うちわは持ち帰っていただき、
 うちわを使う暑い季節(出水期)に、
 学んだ防災に関する知識を思い出していただく

ハザードマップで家の周りには大雨が降ると
 危ないことをイベントで学んだね。
 今年は雨の情報に気を付けよう



自治体担当者

診断の集計結果を確認し、
 住民がどのくらいの防災意識レベルなのか把握できる。



ハムスタータイプが
 若い人に多いから、
 学校での出前講座を
 より推進していこう



シールの凡例

- : ~19才
- : 20~39才
- : 40~59才
- : 60~79才
- : 80才~